

BOOK REVIEW

認知症と作業療法

今や世界共通の…

高齢化率（総人口に対する65歳以上の人口の割合）が、7%を超えると「高齢化社会」、14%を超えると「高齢社会」、21%を超えると「超高齢社会」という定義の根拠は定かではないが、わが国は1970年に「高齢化社会」、1994年に「高齢社会」、2007年に「超高齢社会」に入った。

「きんさん」「ぎんさん」の双子姉妹が1991年（平成3年）に数え百歳を超え、「理想の老後像」と言われてわずか20数年、少子化と併せて高齢化対策は、今や人類にとって最大の課題になった。

認知症と作業療法

現在、認知症の治療は薬物療法とリハが主体で、薬物療法は認知症の進行を遅らせたり脳の機能低下を抑え、リハでは脳機能の活性化を図ったり脳の機能低下を防いだり、二次的な周辺症状（行動・心理症状とも）を和らげることを目的に、回想療法、RO、音楽療法、運動療法、アニマル療法、化粧療法、タクティールケアなどが作業療法とともに行われている。しかし、いずれも試行の段階にあるのが現状である。

本書は必読

本書は現在わが国の認知症治療の最前線で働いている人たちが執筆にあたったもので、内容を概説するより読むことを薦める。本書は3つの章から成り、第1章「認知症とは」では、認知症研究の歴史に始まり疫学的視野から診断と評価を簡略に網羅してみせる。第2章「時期（重症度）別に見る認知症の作業療法の実際」は、発見から看取りまで、OTならではの視点から認知症に対する作業療法のかかわりの実際とこころを伝えてくれる。そして第3章「認知症の作業療法の今後」、この章はどうすればいいのか先の見えない大きな壁の前にして望みを込めた思いが述べられている。

本書は、2013年に企画し、2014年に執筆したと推測される。まさにタイムリー（正直にはやっつ）に出された1冊である。認知症にかかわる者にとっては必読の書、認知症に関する危機を「本当にそうなの？ まさか」と思っている人にはぜひ読んでいただきたい入門の書である。

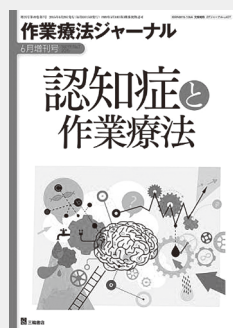
時すでに…

認知症と作業療法を総集した冊子としては紛れもなく大きな意味のある書であるが、しかし、（しかしと言うしかないのだが、）実母と義母、2人の認知症高齢者を抱え、若年性認知症を生きる妻と暮らす高齢期に入ったOTからすれば、時すでに遅し、厳しいかもしれないが、この書でも隔靴搔痒の感をぬぐえないのも事実である。

2015年の『高齢社会白書』によれば、65歳以上の高齢化率は26.0%、そして2035年に33.4%、2060年には39.9%になると推測される中、同年の「新オレンジプラン（認知症施策推進総合戦略）」は誰がいつするのかも不明で、「2020年までに、介護離職ゼロを目指す」という安倍総理の目標は、口にされたその時点で現実感がなく、むなしく響いた。

この状況をどうすればいいのか、これからどうすればいいのか、何をどうしていいか右往左往している人は、この本が入り口を照らしてくれている。今、作業療法の知識や技術、それ以上にその理念とこころが求められているが、OTは淘汰される時代を迎えている。まず、この1冊で自分たちが置かれている状況の概観はできる。今こそ認知症を生きている者や共に暮らす家族の思いに、OTはしっかり応えてほしい。そして、本書の第3章が1冊の書として1日も早く世に出されることを願う。

…「今日はどこに行くの？」と朝から何度も聞く妻とともに…



●作業療法ジャーナル第49巻第7号 (2015年増刊号)

(B5判/250頁/3,800円＋税/三輪書店/2015年)

評者

山根 寛

「ひとと作業・生活」研究会、作業療法士